

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：32826

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02140

研究課題名(和文) アルコール依存症者の回復支援ネットワーク

研究課題名(英文) Social support and recovery network of alcoholics

研究代表者

若林 真衣子 (Wakabayashi, Maiko)

東京通信大学・人間福祉学部・専任講師

研究者番号：70550549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：資料分析により、アルコール依存症者を支援するネットワークの促進要因として研究会や事例検討会を連携体制構築の要とする戦略が有効であることなど、今までの知見・実践例について一定の根拠を示すことができた。

支援関係者に対する調査の結果からは、体制の構造だけでなく、「出欠をあえて電話で確認する」といった、運営上の細かい工夫に着目していく必要があることが示された。

東日本大震災におけるアルコール関連問題支援の調査からは、アルコール関連問題への地域の対応の変化を実感している支援者は多いこと、地域そのものの福祉課題やいわゆる「コロナ禍」の影響により支援に必要な人間関係が分断されつつあること、が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

まず、今まで支援ネットワークについては実践報告の知見が多かった中、様々な実践報告を連携の観点から分析し、その実践の根拠を示すことが出来たことは一定の成果である。

次に、支援ネットワークの先行研究については連携の構造について言及したものが多く、構造だけでなく運営の工夫に着目する必要があることを示せたことも、アルコール依存症者支援に限らず支援ネットワークを考える上で重要な視点を示せた点と考える。

最後に、支援ネットワークの重要性を考える上で災害支援にも着目し、東日本大震災について、いわゆる「コロナ禍」も経由した12年後の現状も踏まえた考察が出来たことについても意義がある。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of the data, we were able to provide some evidence for our previous findings and practices, such as the effectiveness of the strategy of using study groups and case study meetings as key elements in the construction of a cooperative system as a factor in promoting networks to support alcoholics.

The results of the survey of those involved in support indicated that it is necessary to pay attention not only to the structure of the system, but also to the detailed operational innovations, such as "daring to confirm attendance by telephone."

A survey of support for alcohol-related problems in the aftermath of the Great East Japan Earthquake suggested that (1) many supporters felt that the local response to alcohol-related problems had changed, and (2) the welfare issues in the community itself and the effects of the so-called "Corona disaster" were causing the human relationships necessary for support to become increasingly fragmented.

研究分野：社会福祉学

キーワード：アルコール依存症 支援ネットワーク 地域連携 災害支援 東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

アルコール依存症(以下,ア症)の主症状は飲酒に対するコントロール喪失であり,現在の医学では治療対象である主症状が「治癒」困難であるといわれている。しかし,断酒を続ける事によって,健康成人と一見変わらない社会生活を送ることが可能であり,小杉¹⁾は治療目標を「断酒の継続による社会的適応」としている。このため,ア症者の予後のために行う心理的支援は,飲酒のコントロールを取り戻す,「治癒」を目指すものではなく,断酒を継続しながら社会生活を続けていくための「回復」を目指すためのものである。本研究ではア症者の「回復」と,『回復』を支援するネットワーク²⁾について注目する。支援ネットワークについて注目した背景としては,ア症が治癒困難であることから,「回復」のための継続的な支援が必要だからである。

ア症と SHG について,ア症の「回復者」が初めてあらわれたのは,1935 年にアメリカで発足した自助グループ(以下,Self Help Group:以下,SHG)である Alcoholics Anonymous(以下,AA)が最初であるとされている。以来,ア症の治療現場において SHG の果たす役割が重要視されてきた。この AA が,日本においては「断酒会」として,我が国の文化に馴染むように再構成され,ア症者の SHG としては日本において最大規模の組織となっている。ア症者の回復のプロセスとしては AA では,「12 のステップ」を,断酒会は「断酒新生指針」を示している。しかし双方とも回復についての「到達点」は示しておらず,回復に向けて努力を続けていくものであることを示している。先行研究でもア症者の回復には到達点がないということが指摘されている²⁾。

このようにア症者にとって「回復」とは到達点に至ることではなく,「変容し続けること」を維持することであるのならば,SHG において「何が」変容し続けていくのかについて詳細に検討することによって,ア症者の断酒を支援する手がかりがつかめるのではないかと考えられる。

ア症者 SHG の役割についての先行研究³⁾より,「仲間とともに行われる自己との向き合い」が,ア症者の「回復」重要であると考えられる。本研究では「仲間とともに行われる自己との向き合い」を自己意識という視点で検討する。自己意識は,その高まりを自己に注意が集中した状態と定義されている。Fenigstein, Scheier, & Buss⁴⁾は自己意識の強さの個人差を測定する尺度構成を試み,公的自己意識(他者の目に映った自分自身への意識)・私的自己意識(自分自身の内省よりとらえた自己意識)の 2 因子を抽出し,菅原⁵⁾によって日本語版の標準化されている。

以上の背景より,若林・小畑⁶⁾及び若林⁷⁾はア症者と自己意識との関係について調査を行い,ア症者の回復過程で自己意識が変化すること,また,SHG の果たす役割が自己意識の変化に大きく関係している可能性があることを示唆した。

【引用文献】1) 小杉好弘(1997) 専門外来治療 離脱治療・リハビリテーション。日本臨床, 55, 422-428. / 2) 熊谷晋一郎・綾屋紗月(2010) 新しい依存のかたち 回復へのプログラム。痛みとアディクト。特集 現代思想, 38(14), 青土社, 80-96. / 3) 野口裕二(1996) アルコリズムの社会学。日本評論社, 64-73. / 4) Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975) Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527. / 5) 菅原健介(1984) 自己意識尺度(self-consciousness scale) 日本語版作成の試み。心理学研究, 55(3), 184-188. / 6) 若林真衣子・小畑文也(2007) 回復期女性アルコール依存症者の自己意識に関する検討 自助グループ会員を中心に。リハビリテーション連携科学, 8(1), 35-42. / 7) 若林真衣子(2016) アルコール依存症者の回復過程における自己意識について。保健福祉学研究, 14, 27-36.

2. 研究の目的

2013 年 12 月,アルコール健康障害対策基本法(以下,基本法)が制定されたが,基本法の施行によって潜在的なアルコール依存(以下,ア症)症者を見つけ出すことができても,実際は支援機関が少なく,受け皿が足りない危険性がある。現存する支援ネットワークを手掛かりに,支援者が支援しやすい環境について考察し,最終的には支援ネットワーク構築について提言する。

3. 研究の方法

ア症者の回復過程における自己意識の変化について量的及び質的に調査する。量的調査については,ア症専門治療機関患者及び SHG 会員を対象に質問紙調査を行った(研究 1)。質的調査については断酒期間 10 年以上の SHG 会員に対して,半構造化インタビューを行う(研究 2) 予定であったが,コロナ禍等による時間的・方法的制約があったため,以前質問紙調査で収集した自由記述回答の分析を行った。研究 1・2 の結果より,ア症者の自己意識の変化による「回復」に SHG がどのような影響を与えているのかを考察した。

ア症者支援ネットワークについては,まずア症者支援ネットワーク構築に成功している地域の各資料の分析を行い(研究 3),構築に成功している地域のキーパーソンを対象に,非構造化インタビューを行った。インタビュー結果を基に支援ネットワークの構築できた要因を分類・整理

した(研究4)。ア症者の「回復」の過程を踏まえた支援体制について、現在ア症者支援に関わっている専門職・SHG 会員・その他精神保健福祉分野の専門家を対象に半構造化インタビューを行った(研究5)。途中、支援ネットワークについて考えるにあたり、ネットワークの重要性が一番成果として出るのが災害時であると考え、研究3~4に加える形で東日本大震災におけるアルコール関連問題支援についてのインタビュー調査も行った。

<倫理的配慮>

全ての調査について、調査前に調査の趣旨を説明し、回答は任意である事、また、データについては、研究以外の目的では使用しないこと、途中で面接中断の自由があること、論文執筆の際に個人の特長が来れないような記述をすることを説明の上、同意を得られた場合のみ、調査を行うこととした。なお、本研究は東京通信大学人を対象とする研究の倫理委員会の承認を得ている。(東通倫研第 201803 号)

4. 研究成果

まず、研究1・2として回復像の研究の一環としてア症者の飲酒理由の分析を行い、ア症者の飲酒の背景には自己治療仮説を支持する内容のものが多くことが示唆された。(成果物1) 研究1の内容で一部先行して行っていた内容(研究開始当初の背景文献6と7)も併せて考察すると、ア症者は飲酒が必要な状況からア症に罹患し、自助グループの中で自己意識が変化し、回復していく可能性が考えられ、そのためには支援ネットワークによる長期的な支援が必要であることが考えられる。

次に研究3「ア症者支援ネットワーク構築に成功している地域の各資料の分析」を行い、ア症者を支援するネットワークについて、今までの実践例がなぜ有用だったのか、またどのような課題をもっているのか、「連携」そのものの展開過程・促進要因・阻害要因の観点から分析した。まずソーシャルワークの「連携」の概念について整理し、次にアルコール専門支援を行っている医療・福祉分野の「連携」に関する報告・知見をまとめ、それらが「連携」の展開過程・促進要因・阻害要因の知見と照らし合わせた。その結果、展開過程については個人レベルの顔の見える関係性の段階とその先の広がりや連携内容の底上げの段階があり、支援対象となる地域の現状に応じてその内容が細分される可能性があること、促進要因としては研究会や事例検討会を連携体制構築の要としてきた例は多いが複数の観点からこれが有効であることなど、今までの知見・実践例について一定の根拠を示すことができた。(成果物2)

支援関係者に対する調査の結果からは、体制の構造だけでなく、「出欠をあえて電話で確認する」といった、運営上の細かい工夫に着目していく必要があることが示された。(成果物3)

東日本大震災におけるアルコール関連問題支援の調査からは、アルコール関連問題への地域の対応の変化を実感している支援者は多いこと、地域そのものの福祉課題やいわゆる「コロナ禍」の影響により支援に必要な人間関係が分断されつつあること、が示唆された。(成果物4・5)

ア症者の支援ネットワークと回復過程との関連性について、研究4・5の結果の一部については追加調査の必要性があるが、これが進行できればさらに回復過程と支援ネットワークに必要な要素を抽出できる可能性があるため、引き続き研究を続けていく。

【成果物】

1) 若林 真衣子・小畑 文也(2019)アルコール依存症者の飲酒理由 自己治療仮説の観点から . 東京通信大学紀要, 1, 49-58 .

2) 若林 真衣子(2020)わが国のアルコール依存症者支援における連携について : 展開過程・促進要因・阻害要因の検討 . 東京通信大学紀要, 2, 105-117 .

3) 若林真衣子・若林功(2021)アルコール依存症支援ネットワークの形成過程に関する調査 : 障害福祉サービス事業所を中心に . 日本リハビリテーション連携科学学会第22回大会 .

4) 若林真衣子(2020)第6章震災とアルコール関連問題 . 廣野桂子・矢口和宏・矢尾板俊平・野坂美穂・若林真衣子・生駒忍・亀谷祥治・坂本直樹(2020)東日本大震災から10年再生・発展における課題の分析 : 経済分析とメンタルケアの視点から : 今後の震災に備えた政策提言!

5) 若林真衣子(2024)東日本大震災におけるアルコール関連問題への支援と12年後の状況-福島県・宮城県・岩手県を中心に . 精神保健福祉学 11(1) , 30-38 .

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 榎原克哉・添田雅宏・若林真衣子・田中英樹・松為信雄	4. 巻 5
2. 論文標題 精神医療の脱施設化の現状と課題に関する探索的研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東京通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 250-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高濱壮斗、大竹伸治、黒沢麻美	4. 巻 2
2. 論文標題 精神保健福祉士養成課程における資格取得後のスーパービジョン活用の取り組みに対する課題 文献調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東北文化学園大学現代社会学部現代社会学科 社会学・社会福祉学研究	6. 最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 泉啓	4. 巻 107
2. 論文標題 母娘問題としての父娘姦：二〇世紀中葉における精神分析的解釈の出現と変容を巡る考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 101-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 たら澤 邦男, 尾形 倫明, 森谷 就慶, ほか	4. 巻 58巻Suppl.
2. 論文標題 NDB集計データと公開データを併用したがん患者の都道府県別在宅看取り割合と医療資源等との関連に関する研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本医療・病院管理学会誌	6. 最初と最後の頁 172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榑原克哉・若林真衣子・添田雅宏・加藤慶・田中英樹	4. 巻 4
2. 論文標題 榑原克哉・若林真衣子・添田雅宏・加藤慶・田中英樹（2022）精神障害者のための地域包括ケアシステムにおける精神科診療所の役割に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東京通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 345-348
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 若林真衣子	4. 巻 68
2. 論文標題 アルコール依存症の支援ネットワークを考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 連携通信 日本リハビリテーション連携科学学会会報	6. 最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉啓	4. 巻 107
2. 論文標題 母娘問題としての父娘姦 20世紀中葉における精神分析的解釈の出現と変容を巡る考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 不明
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 泉啓	4. 巻 24
2. 論文標題 グループワーカー練習の会話分析的考察 初学者のコミュニケーション・トラブルと改善可能性を巡って	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩手県立大学社会福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 不明
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 若林功, 若林真衣子, 八重田淳	4. 巻 39
2. 論文標題 依存症者を主対象とする障害者就労継続支援B型事業所における就労支援	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 常磐大学人間科学部紀要人間科学	6. 最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 泉啓	4. 巻 13
2. 論文標題 「ポスト禁酒法時代のアルコール広告に見る「節度ある飲酒」の表象 全米醸造業協会、シーグラム社を中心とした考察」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 平成30年度 (2018年度) TASC研究助成報告書	6. 最初と最後の頁 106-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若林真衣子	4. 巻 2
2. 論文標題 わが国のアルコール依存症者1)支援における連携について 展開過程・促進要因・阻害要因の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 105-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 若林真衣子・小畑文也	4. 巻 1
2. 論文標題 アルコール依存症者の飲酒理由 自己治療仮説の観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京通信大学紀要	6. 最初と最後の頁 49-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大竹伸治
2. 発表標題 SSTの基本訓練モデルを用いた対応の検討
3. 学会等名 仙台市教育員会主催「令和4年度心のケア研修（SSW研修0615）」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大竹伸治
2. 発表標題 インシデントプリセス法を活用した事例検討 1
3. 学会等名 仙台市教育員会主催「令和4年度心のケア研修（SSW研修0926）」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大竹伸治
2. 発表標題 インシデントプリセス法を活用した事例検討 2
3. 学会等名 仙台市教育員会主催「令和4年度心のケア研修（SSW研修0926）」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 若林真衣子
2. 発表標題 社会資源としてのセルフヘルプグループ
3. 学会等名 Young Sober Meeting（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 たら澤邦男, 尾形倫明, 森谷就慶, 千葉宏毅
2. 発表標題 NDB集計データと公開データを併用したがん患者の都道府県別在宅看取り割合と医療資源等との関連に関する研究
3. 学会等名 第59回日本医療・病院管理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 添田雅宏・若林真衣子・櫛原克哉・加藤慶・田中英樹
2. 発表標題 地域包括ケアシステムと精神科診療所の実態に関する一考察
3. 学会等名 第9回日本精神保健福祉学会学術研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 若林真衣子・若林功
2. 発表標題 アルコール依存症支援ネットワークの形成過程に関する調査：障害福祉サービス事業所を中心に
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会第22回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 若林功・若林真衣子・八重田淳
2. 発表標題 依存症者を主対象とする障害者就労継続支援B型事業所における就労支援
3. 学会等名 日本リハビリテーション連携科学学会第22回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大竹伸治
2. 発表標題 スクールソーシャルワーカー活用事例集について
3. 学会等名 宮城県教育庁高校教育課主催 令和元年度高等学校スクールカウンセラー活用事業に係るスクールソーシャルワーカー第1回連絡会議（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 若林真衣子・生駒忍（分担）廣野桂子・矢口和宏編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大成出版社	5. 総ページ数 220
3. 書名 東日本大震災から10年 再生・発展における課題の分析 経済分析とメンタルケアの視点から	

1. 著者名 森谷就慶（分担）一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 現代の精神保健の課題と支援	

1. 著者名 森谷就慶（分担）一般社団法人日本ソーシャルワーク教育学校連盟編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 中央法規出版	5. 総ページ数 320
3. 書名 現代の精神保健の課題と支援	

1. 著者名 生駒忍・若林真衣子(分担)廣野桂子・矢口和宏編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大成出版社	5. 総ページ数 220
3. 書名 東日本大震災から10年 再生・発展における課題の分析 経済分析とメンタルケアの視点から	

1. 著者名 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構(編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構	5. 総ページ数 445
3. 書名 平成30年度障害者職業生活相談員資格認定講習テキスト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	泉 啓 (Hiraku Izumi) (20646426)	岩手県立大学・社会福祉学部・准教授 (21201)	
研究分担者	大竹 伸治 (Otake Shinji) (40382577)	東北文化学園大学・医療福祉学部・准教授 (31310)	
研究分担者	森谷 就慶 (Moriya Yukinori) (80382696)	東北文化学園大学・医療福祉学部・教授 (31310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	若林 功 (Wakabayashi Isao) (20714934)	常磐大学・人間科学部・准教授 (32103)	
研究分担者	高濱 壮斗 (Takahama Masato) (10971947)	東北文化学園大学・現代社会学部・助教 (31310)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関